

立教開宗



立教開宗は教えが開かれ、宗教・宗派が新たに生まれることです。仏教では釈尊一代の教説の中から根拠とすべき経典を選び、これによって独自の教義を立てて、一つの宗門を開くという意味です。親鸞聖人の著書は様々ありますが、その中で浄土真宗にとって一番大切な『教行信証』の成立を親鸞聖人五二歳の時、すなわち元仁元年・一二二四年とみて、この年を立教開宗の年と定めています。ただ親鸞聖人が「浄土真宗」という言葉で表そうとされているのは、法然聖人から教えていただいた「阿弥陀さまの浄土に生まれていく他力真実

の教え(宗)でした。阿弥陀さまによつて、お釈迦さまが『無量寿経』という教え(教)を説かれ、そこで明らかにされた本願他力の念仏法(行)を、私たちに受け入れさせて(信)、お念仏申す人生を歩ませ、命を終えると同時に往生即成仏(証)させて下さり、往生成仏のさとりを開いた者が、欲や怒りの煩惱渦巻く穢土に還り来て、様々な姿に千変万化し、逆縁に苦しみ悩む我々を救い、仏法の領域へと導いて下さるといふ教行信・証です。これが私たちにくぐまれる浄土へ往生し成仏すること(往相)も、そのさとりの必然として、迷いの世界に還り来て救済の活動をする(還相)も、すべて阿弥陀如来の回向によるものであることが示されています。この『無量寿経』の教えとは、端的には阿弥陀さまが私たちに「南無阿弥陀仏(まかせよわれに)」と願われていることを教えています。



親鸞聖人御誕生八五〇年ならびに立教開宗八〇〇年の慶讃法要をともに迎えたいと思います。

石釜山 明光寺 新住職のごあいさつ

住職拜命のごあいさつ

このたび浄土真宗本願寺派「石釜山 明光寺」住職を拝命いたしました。身に余る光榮であると同時に責任の重大さをこれまでに感じております。一般の家庭に生を受け、先々代、先代に導かれ、仏さまの尊いご縁をいただき、明光寺に養子として受け入れていただいたこと、まことにありがたく思っています。

前述の通り、お寺の生まれではないため、お寺の普段の生活というものを全く知らず、右も左もわからない私をあたたく迎えてくださった門信徒の皆さまはじめ、早良組や明光寺開かる全ての皆さまに心からお礼申し上げます。

先々代、先代は、多くの皆さまのご尽力のもと、本堂再建に奔走され、立派な本堂を残してくださいました。

残念ながら、浅学非才の身である私には、そのように新しく本堂を建立でき

るような力はなく、遺して

いただいたものを守り続け、ともにお念仏を喜ぶ一人として、み教えを聞かせていただく仲間として、歴代の明光寺住職同様、皆さまとともに歩む一人の念仏者でありたいと思っております。

今後この初心を忘れずに明光寺住職として務めを果たして参ります。仏祖の冥加を受け、門信徒の皆さまや早良組にかかわる全ての方々のお力添えを賜り、四八〇年続いた明光寺の法灯を絶やさぬよう、そして次代にこの法灯を引き渡すため、精一杯務めさせていただきます。

現在、お寺以外の仕事を携っているため、なかなか住職としての責務に注力することができず、私や明光寺を支えてくださる多くの方々へ申し訳ないという思いとともに、こんな私のために手を差し伸べてくださる方がいてくださることの心強さが、絶えず心の中を占有してい

ます。

このように、皆さまに助けたいお願いも、いろいろありますが、今後とも変わらぬご指導のほどよろしくお願いいたします。

令和五年一月
浄土真宗本願寺派
石釜山 明光寺
住職 鳥飼智弘(釋泰智)
合掌



早良組
だより

親鸞聖人御誕生
50
立教開宗
800
ご縁を慶び、お念仏とともに

はじめに



令和五(二〇二三)年は、宗祖親鸞聖人のご誕生から八五〇年の年です。また来年は聖人が「顕浄土真実教行証文類(教行信証)」を著されて浄土真宗のみ教えを開かれた「立教開宗」から八〇〇年となります。それにあわせて本願寺では三月から五月の間、「親鸞聖人御誕生八五十年・立教開宗八〇〇年慶讃法要」が勤修されます。

厳しい時代を生きられた聖人のみ教えは、同じように戦乱や災害、そして信仰などの問題に直面している現在の私たちにも通じる大切なものです。



親鸞聖人のご誕生、ならびに立教開宗をお祝いする慶讃法要は、死にゆく私たちが生きるために大切なこととはなにか、改めてお聞かせいただく大切なご縁となります。

また本願寺には多くの国宝や重要文化財があり、慶讃法要の期間には普段非公開のところも公開されます。

今回の慶讃法要をご縁として、初めて本願寺に参詣される方もおられることでしょう。

今号はそうした本願寺の見どころを特集しておりますので、本願寺参拝にお役立ていただければと思います。

西本願寺



境内のご案内

西本願寺を
散策しましょう。



1 御影堂

2014年に国宝に認定。東西48m、南北62m、高さ29m。中央に親鸞聖人の木像、両脇に本願寺歴代宗主の影像を安置し、両余間には十字名号(帰命尽十方無碍光如来)と九字名号(南無不可思議光如来)を安置しています。



2 阿弥陀堂

2014年に国宝認定。東西42m、南北45m、高さ25m。中央に阿弥陀如来の木像、両脇にインド・中国・日本の七高僧の内、龍樹菩薩・天親菩薩・曇鸞大師・道綽禪師・善導大師・源信和尚の六師を、両余間に法然聖人と聖徳太子の影像を安置。一般寺院では七高僧で一幅です。



3 飛雲閣

金閣、銀閣とともに京都三名閣の一つ。境内の東南隅にある名勝 滴翠園の池に建つ三層柿苜の楼閣建築です。全体的に柱が細く障子の多いことから、空に浮かぶ雲のようだと、飛雲閣と名づけられたといわれています。庭園と一体となった、日本を代表する建築の一つです。

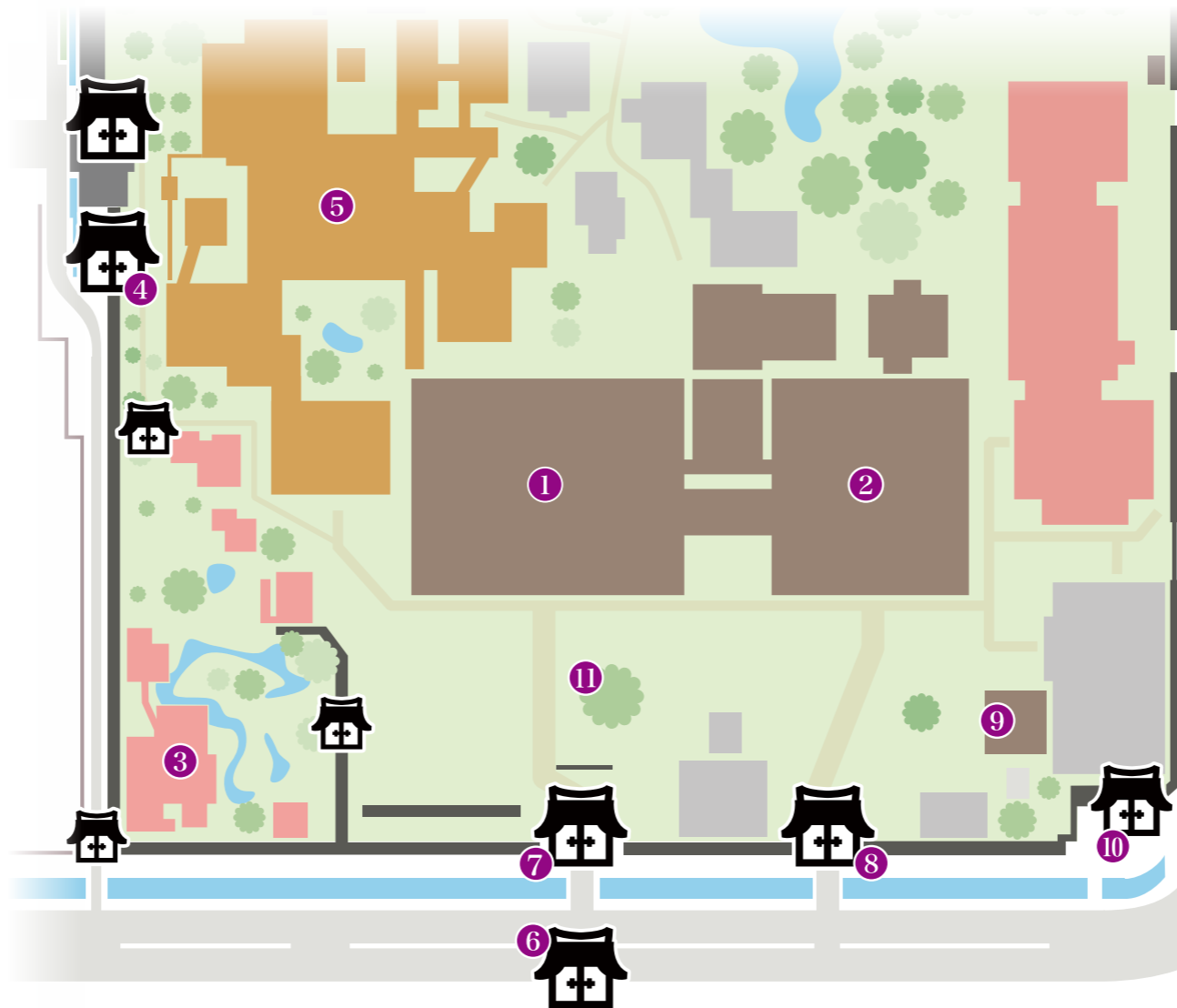


4 唐門

桃山時代の豪華な装飾彫刻を充滿した檜皮葺き・唐破風の四脚門です。彫刻の見事さから「日暮らし門」とも呼ばれています。扉上部にある麒麟の彫刻はキリンビールのモデルになったとかなってないとか。※諸説アリ



開法会館側



6 総門

本願寺から堀川通りを隔てて建てられており、もともとは門前の寺町を仕切るためにあったと言われています。蓮如上人450回遠忌の1898年、親鸞聖人650回大遠忌を控えた1911年、1959年に京都市の要請により現在地へと、これまでに三度移築されています。



7 御影堂門

親鸞聖人600回大遠忌を前に1859年、大阪の講社が修理。1960年、親鸞聖人700回大遠忌を前に修理。2006年から2009年にかけて、親鸞聖人750回大遠忌を前に築地塀と併せ石工事・屋根工事・金物工事などが実施。屋根工事では瓦の葺き替えをし、再利用する旧瓦は南面にまとめられています。



8 阿弥陀堂門

大規模な四脚門で、独特の組物構成を持ち、彫刻や鍍金具などで装飾されている。本願寺の表構えを構成し、規模雄大で質が高く、優れた意匠と技術が結集されており、江戸時代を通じて発展した真宗本山の格式に相応し建築として価値が高い。



9 経蔵

経蔵に納められている『大蔵経(一切経)』は天海僧正の開版されたもので、寛永12(1635)年、江戸の寛永寺で発起し、12ヵ年をかけて完成。天海版や寛永版とも称されます。幕府の要請と本願寺第13代良如宗主の希望により慶安元(1648)年9月に銀27貫目で購入しました。



10 太鼓楼

蓮如上人450回遠忌の1898年、親鸞聖人650回大遠忌を控えた1911年、1959年に交通量の増加に対応した堀川通りの拡張により、京都市の要請で現在地に移転と、これまで三度移築されています。虹梁に大柄な二組の蓼股を配しています。2011年に修復。



11 大銀杏

京都市の天然記念物に指定された樹齢約400年の大銀杏。根っこを天に広げたような珍しい形から「逆さ銀杏」の名があります。天明8(1788)年の火災の時に、この銀杏から水がふき出して火を消し止めたという伝説があり「水吹き銀杏」「火伏せの銀杏」とも呼ばれています。



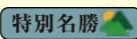
白書院



対面所の大広間に対して小広間とも呼ばれ、ご門主の対面の儀式や賓客の接待などに使われていました。二十四畳敷の一の間を主室、二の間、三の間の三室が一列に並んでいます。



虎溪の庭



虎溪とは中国江西省、廬山の溪谷のことで、御影堂の屋根を名山・廬山に見立てた借景とし、巨石で表された枯滝から砂礫の川の流れが大海に注ぐ様を表されています。



黒書院



黒書院は内向きの対面や接客、門主の寺務を行う場として使われました。部屋も堅苦しい書院造りではなく数寄屋風に造られ、狩野探幽の見事な水墨画が描かれています。



対面所(鴻の間)



対面所の上段中央には間口の広い床、左端に帳台構、右端の上々段に違棚、付書院を配して、正面に一列に並べているのは御堂の形式を模したもので、本願寺独特の意匠です。

5 書院・能舞台

本願寺の書院は、桃山時代に発達した豪華麗な書院造の様式の代表的なもので、座敷飾(床、違棚、帳台構、付書院)を完備し、金碧障壁画や彫刻で飾られています。書院は、対面所と白書院に大別でき、対面所の西側に雀の間、雁の間、菊の間などの小室があります。白書院の北側には装束の間があり、対面所と白書院のあいだに納戸が二室、両書院の周りに

狭屋があります。対面所は寛永年間(一六二四〜一六四四)の造立で、白書院はそれよりやや古く、もとは別々の建物でしたが、後になって今のようにつながされました。ほとんどの書院の障壁画は、渡辺了慶とその一派の筆になるもので、小室の間は円山応挙門人の円山応瑞とも吉村孝敬の筆ともいわれています。

※書院拝観は許可が必要です。拝観を希望される場合はお手次のご寺院にご相談ください。



南能舞台 北能舞台 2つの能舞台

書院の南北にある常設の能舞台。北は現存する最古の能舞台で白書院を見所とし、正面が入母屋造りで古式を感じます。南は切妻造りで江戸前期に整備され、対面所が見所。現在は毎年親鸞聖人の降誕会に祝賀能が舞われます。